

学生記者の「取材を通してみた中大」

愛しちゃったのよ、

ラララン♪



経済学部
下手 円

私は今、自動車免許を取るために福島にいる。教習所に来る前は「自動車の運転なんてへっちゃら、へっちゃら」と軽く考えていたが甘かった。教官に「お前の運転、あかぬけねえっぺなあ」なんて福島弁で言われると思わずブツと吹き出してしまい、注意されたことを一瞬にして忘れてしまふ。ハンドル操作より福島弁が上達しちやいそ。

六人部屋で同室になった女の子の一人に、「どこの大学?」と聞かれ、「中大だよ」と答えると、「私も私も」なんでも彼女は小学校六年生のときから中大に憧れていたらしい。もちろん第一志望。最近、中大の志願者数が落ちていると聞き、気になっていた私は、彼女に聞いてみた。「ど

うして中大を第一志望にしたの?」
「中大の自然が大好きなんです。高
二の冬、中大へ見学に行つて、私は
ここに来るんだって思つたんです。
春は桜広場で花見。夜はクレセント
ホールの横一面の芝生に寝そべつて
星を眺める。いやあ、イツスよね
え。まるで居酒屋で一杯ひっかけ
ているようないい気分になった。
18歳の女の子なんて、大学に対し
て愛着なんてもってないだろうと
思つていた、私の予想は見事にはず
れた。彼女は中大を愛しちゃつてい
るのだ。

きょう、学校のどこかで唄いたい



法学部
渡邊 直司

司会 学生記者の思い出は?

ふと、私はどうなのだろうと思つた。学生記者になりたての頃、ただ名前の響きにカッコよさを感じていただけだったように思う。取材を重ねていくうちに、カッコよさではない別の魅力を感じ始めていた。人との出会いだ。取材でお世話になった中大の先輩方の姿に励まされ、広報課の皆さんにはいつも温かい言葉をかけていただいた。落ち込んだ時は友人の学生記者が慰めてくれた。出会つた人々とその言葉に支えられた四年間だったと思う。私もいつの間にか中大を愛しちゃつたのだ。最後にモノレールで学校に来たかつたべなあ。ほんどに残念だつて。

渡邊 ぼくは、白門祭の記事を2回(97・98年)書いただけでした。思い出といえば、友達に「ウチのサークルを載せる」とゴリ押しされて、「おこつてやるから」の一言で、取材をOKしてしまつた事くらいです。司会 学生記者はみなマジメで頭脳

明晰、といったイメージがあるが? 渡邊 確かにそうですね。それにみんなしつかり者です。ぼくはふだんからいつも悪ふざけばかりしているお調子者です。でも、仕事だけはしっかりやつたという自負があります。ただこちらがシャレのつもりで言つたり書いたりした事を他の記者や編集責任者にそう受け取つてもらえない、というスレ違いが度々あります。でもぼくは、シャレという言葉をもマジメという言葉にそっくりそのまま置き換えても同じ事が言えるのでは、と思つのです。

司会 学生記者になつたのはなぜ? 渡邊 ぼくは書くことが好きでした。それは、人とまともな会話ができないからでした。おしゃべりなタイプなのですが、自分の考えや主張を話すのが苦手でした。だから、ぼくは「人に伝える」、そして「人と繋がつている」ということに飢えていたのかも知れません。司会 「人と繋がる」事はできた? 渡邊 いいえ、でも、他の活動で、例えば、漫才をやつたり、学祭で唄つ

たり、ドラマを書いて上演したりする事では、「人と繋がっている」という実感がありません。

司会 最後に、取材したいものは？
渡邊 太宰治の小説に「笑われて、笑われて、つよくなる」という言葉があります。ぼくは、「笑われて、笑わせて、つよくなる」事が目標で

勉強になった「OB」と「高校生」取材



法学部 吉田 傑

世の中の人が何を考えているのかわかりたい。何を思い描き、どう生きていくのか。私の大学時代（とは言っても、幸か不幸か来年も大学生を送ることになるのだが）の問題関心は一貫している。

かなり病的である。ともすると、人のプライバシーの領域に入りがちな問いかけに、周りの人たちは迷惑

す。ぼくは人を笑顔にすることで自信がきます。つよくなれます。ぼくは卒業式の日、学校のどこかで唄います。自信をつけてから、卒業したいのです。ぼくが取材したいのはコイツです。威張ったような事はかり言って、すみませんでした。

がつているかもしれない。ヤバイ人だと後ずさりする人もいたかもしれない。でも、やめられないのである。私が学生記者になったのも、そんな理由からである。言い方は悪いが、立場を利用してやろうと思っただけだ。一個人ではなかなか接することのできない人にも、会って話を聞くことができる。実際、様々な人のバックアップがあつて、そんな経験ができたと思う。

印象深かったことは二つ。一つは、就職座談会という形で、実際に社会で活躍されているOBと話ができたこと。もう一つは、大学説明会の取

材にかこつけて、現役の高校生と話できたことである。OBとの話では、社会人としての自信から発するオーラを言葉の内容以上に感じたし、反面、大学生に戻りたい、もっと勉強しときゃよかったなど、「冗談やユーモアといった部分を垣間みることもできた。一貫していたのは、若い人ともつと話がしたい。世話してやりたいということであった。どうやら、私たちは遠慮せず、どんどん

ウォーキングラリーで愛校心が



文学部 犬塚 順子

6学部もあるマンモス大学でキャンパスもばかでかく、校内で顔見知りには会う確率も非常に少ない。サークルにも属していない私は、大学へ入ってから、ずっと愛校心を持ってずらにいた。学園祭などの行事も「やっ

お世話になってかまわないようだ。現役の高校生との話は、こちらが元気づけられた気がした。また、安心もした。メディアの情報とは異なり、彼らは純粹でしつかりしていた。こんなふうにああ、私は楽しく生きてきたのだと思うし、これからも楽しく生きるであろう。人生の風景を通過点だとして過ぎ去るのではなく、私を支えてくれた人を大切に、これからも生きていきたい。

た！授業がない」くらいにしか思わなかった。

そんな私が『Hakumonちゅうおう』の学生記者になり、初めての取材が、相模湖から高尾山を越え中大まで歩く、恒例行事「ウォーキングラリー」だった。全行程はなんと山手線1周分に相当する32^キ。6月といつても日中の日差しは強く、日ごる運動不足の体には非常にこたえる。ただ「早く着かないかな」という気持ちで黙々と歩いた。しかし、

学生記者の「取材を通してみた中大」

学生記者の「取材を通して見た中大」

多摩周辺の地理に明るくない私は、

自分が今どの辺を歩いていて、あとどれくらいで中大なのかという見当がさっぱりつかない。野猿街道へ入り中大へ続く坂のふもとまで来た時は、まるで故郷へ帰ってきたような気分になり、暗くなった空の下に白く中大が浮かび上がって見えたときには思わず声が出そうだった。その時、私の心は「この中央大学こそが私の大学だ」という、入学以来抱いたことのなかった気持ちでいっぱいになった。

そして、さらに印象的だったのが、ゴール後に参加者達が集まって歓談

している中で、グループで参加した

夜間自治会の学生達が輪になって中大の校歌を歌い出したことだ。その歌は「あゝあゝ、ちゆうおう」が、「あゝあゝ、よーるじー」という替え歌になっていたのだが、彼らの歌から中大生としての誇り、中大への愛情が感じられ「そういうのって、いいなあ」と胸が熱くなった。

私にとってウオーキングラリーへの参加が、卒業して何年経っても「自分は中央大学の卒業生だ」と胸を張って言えるような、そんな学生生活を送るきっかけになったことは確かだ。

卒論につながったインタビュー



法学部 山崎 有美

『これから先は、とにかく自分が生きてみることだ』—— 沢木耕太郎

氏が学生時代に書かれた卒論の最後の一行だ。横浜国立大学の経済学部の学生であった氏だが、経済学に関する論文を書く気になれなかったそこで、なかば破れかぶれといった気持ちから、そのころよく読んでいたアルベール・カミュの評伝を書くことにしたそう。そして、カミュ

の評伝を書きながら、どこかで自分の生き方を探し求めていたのだと思う、と自身の著書に綴る。

一方、自身の卒論はこんなふうになってしまっている。「制度にはまったく興味が湧かなかったので、“ヒト”を選んでみました。元オリンピック・バレーボール選手にインタビューをするという、在学中の経験を通して見つかったテーマであると言ってよいかもしれません」。昨年「人間ドキュメントシリーズ」で、元オリンピック選手の嶋岡さんの取材を担当し、「人と向き合う」という機会を与えていただいた。卒論との繋がりを見ると、その体験自体が非常に貴重なものとなっていたこ

とを改めて思う。

沢木氏は「もし私に、青春期の成長の過程で、ひとつの時代からもうひとつの時代に踏みこんだかもしれないと思えるような画期があったとすればそれはたぶん卒論の最後の一行を書き終えた瞬間だったにちがいない」と述懐する。卒業論文。私にとっても本当に意味のあるものだった。そのテーマはまぎれもなく学生記者での経験から生まれた「何でもやってみる、食いついてみる」というものだ。

そう考えると、中大にいらしやる著名な方々の講演にもっと足を運ぶべきだった。

色々な出逢いに恵まれた中大四年間に感謝します。

「支えられる側」から「支える側」に



法学部 田村 響

四年間の大学生活で、私は学生記者という、普通の学生には体験のできない経験をする事が出来た。中でも、3年の時に一年間担当した「キャンパス・アイ」は、自分の才能のなさに悩まされながらも、普段

見ることの出来ない大学の姿に直に
触れることが出来、自分にとって貴
重な財産となった。

今、これら自分の撮った写真を見
て改めて思うのは、この大学を本当
の意味で支えているのは我々の目に
触れない所で仕事をしている人たち
だということである。

朝、教室に行くとすでに黒板はき
れいになっている。ジュースの空き
缶はいつの間にかリサイクルに回っ
ている。時間になると郵便物が配ら
れる。本はいつの間にか修理されて
いる……。これらは決して勝手に完
了する仕事ではなく、そこには人知
れず黙々と汗を流す人々がいた。こ
れぞ私の大学生活に於ける最大の発
見であった。

何を当然のことをいまさら、と思
われる向きもある。しかし、この
当然のことを意識した人がどれだけ
いようか。我が国には「勤めあげる」
という美しい言葉。「勤める」では
なく「勤めあげる」がある。勤労と
いうことの価値が低下し、全ての物
事を単なる権利義務としてしかとら

えることが出来なくなりつつある今
日、少しずつ一日一日、真正直に小
さな小さな石ころを積み上げ、今ま
さに最後の石を、人生のその山の頂
に置こうとしている、そんな語感の
この言葉は、このような時代だから
こそ、その輝きを増しているように
思われる。そして母校、中央大学は
日々、陰にあっても自らの仕事に誇
りを持ち、献身的に学生のために勤

めあげてくれていている人に満ち、支え
られていた。
さあ、今日は卒業式。明日からは
これまでの「支えられる」身分から
自分たちが社会を支える身分となら
なければならぬ。
卒業にあたって、私の見た、真に
大学を支えてくださった多くの教職
員、館員、清掃員の方々に心からの
謝意を敬意を表し、母校を去りたい

コミュニケーションこそ私の宝



経済学部
望月 幸子

私が取材の中で一番緊張し、そし
て感銘したのが二回の「人間ドキュ
メントあの日あの時」の取材で、横
溝三郎さんと嶋岡健治さんにお会い
した時だ。横溝さんは駅伝で、嶋岡
さんはバレーボールで、お二人とも
日本・世界のトップに立つた先輩だ。

学生記者の「取材を通して見た中大」

だったに違いない。横溝さんの「レー
スでの失敗は、すべて練習不足であ
る」と、自らの行動にすべて責任を
持つ姿。嶋岡さんの「バレーでは次
の人のことを思いやっつてプレーし、
その時々を大事にしていくことが大
切。これは生活すべてにおいて共通
して言えることですね」という言葉。
どちらもとても記憶に残る重みのあ
る言葉だ。

当たり前のことを成し遂げるため
にも、強い信念を持ち、軽い気持ち
で物事を行ってはいけないことを、
二人の先輩から感じた。私もこの気
持ちは忘れずにいたい。

学生記者の活動はすべて貴重な経
験だ。多くの人と話をし、いろいろ
な人の考えや価値観も生で聞いた。
また、文章で表現することの難しさ
を常々感じた。とにかく書ききれな
いほど良い経験がたくさんできた。
そして多くの人とコミュニケーション
を交わし議論することは、自分を
高めると同時に、自分ってどんな人
間なのか、なんとなくなわかってくる
ような気がした。